

青年期における成長不安と抑制不安の相互作用に関する検討 — 人間的成長性との関係について¹ —

筑波大学心理学系 山本 誠一

The relationship of positive anxiety and negative anxiety to human growth in adolescence.

Seiichi Yamamoto (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

This study aimed at examining the relationship of two distinct aspects of anxiety (positive anxiety, negative anxiety) and human growth. Two anxiety scales and two other scales of human growth (Purpose-In-Life Test and Identity Dimension Scale) were administered to 817 high school students and 379 undergraduates.

The main results were as follows.

- 1) The students with low negative anxiety and high positive anxiety showed high desire to find the meaning in life. The students with high negative anxiety showed low desire for the meaning in life regardless of positive anxiety level.
- 2) The students with low negative anxiety showed high identity dimension level.

Key words : anxiety, human growth, meaning in life, identity, adolescence.

山本(1988)は、哲学(kierkegaard, S. A. 1844, 1849; Heidegger, M. 1927), 精神医学(鈴木, 1960, 1987; 田代, 1984など), 心理学等(Mandler, G. & Sarason, S. B. 1952; Alpert, R. 1960; Wolpe, J. 1958; Spielberger, C. D. 1966, 1972; Rollo, M. 1950; Frankl, V. E. 1957; Freud, S. 1895, 1926; Horney, K. 1986; 西里, 1960; 今田, 1972, 1975, 1980; 加藤, 1964; 依田, 1968; 津留・西平, 1968; 小林, 1973; 福井, 1980など)の観点から不安(anxiety, Angst, anxiété)に関する諸研究について検討を行った。その検討をとおして、1)ある種の不安が人間的成長にpositiveな働きをもち、2)特に青年期においては人格発達の観点から、この視点がきわめて有効であること、に関する洞察や記述は多いが、実証的に検討したものは見当たらないことを指摘した。

さらに山本はこの文献的・概念的な検討をふまえた上で、青年期の不安をa-prioriに「成長不安」(人間的成長によりpositiveな意味を持つ不安; 人間的成長を促進する働きをもつ不安)と「抑制不安」(人

間的成長によりnegativeな意味を持つ不安; 人間的成長を抑制する働きをもつ不安)に2分類し、実証的手法による尺度構成(Table 1)を試みた。またこの尺度の妥当性を検証する過程で、成長不安の特質をより明確にする諸検討がなされてきた。

しかしながら、以上の検討では、どれも成長不安と抑制不安の相互作用についての視点は考慮されていない。現実を生きる実際の青年をより適確に把握しようとする場合、抑制不安と成長不安の双方を合わせ持った存在として考える必要がある。つまり、以上のような両不安に関する別々の検討から得られた知見をふまえつつ、さらに両不安を組み合わせた要因の検討が重要となってくるわけである。したがって本研究では、抑制不安と成長不安の双方を同時に考慮して、青年期における両不安の相互作用(組み合わせ)の観点から、人間的成長・人格発達との関係について検討することを目的とする。

方法

(1) 調査の対象および内容

以下の3尺度を都内公立の高校生(普通科)817名、

1 本論文は、筑波大学に提出された修士論文(山本, 1988)の一部を加筆修正したものである。

Table 1 成長不安と抑制不安の項目

<成長不安の項目>

- 1 手のとどきそうでとどかないものをねらうのは、不安だがやりがいのあることだ。
- 2 なにか目標に向かって前進していないと、落ち着かない。
- 3 将来やりたいことができるようになるためには、今のんびりしてはられない。
- 4 逃げ出したくなるようなことでも、やるべきことはやらねばならない。
- 5 一生、平均的な人間で終わってしまうのは、がまんできない。
- 6 将来、夢や理想が実現できるかどうか気がかりだが、とにかくやっていくしかない。
- 7 将来、満足のいく仕事ができるかどうか心配だが、とにかく努力してみたい。
- 8 自分にもっと自信がもてるように、がんばらねばと思っている。
- 9 まだまだ努力が足りないのでは、と心配になる。
- 10 友達やライバルに負けると思うと、くやしくてたまらない。

<抑制不安の項目>

- 1 何をしても失敗しそうで、いつも心配だ。
- 2 将来、何か恐ろしいことが起きそうな気がしてたまらない。
- 3 自分の考えを主張すると、人から嫌われてしまいそうで心配だ。
- 4 わけもなく不安になることが多い。
- 5 つまらないことで、くよくよ悩んでしまう。
- 6 不安でたまらず、何も手につかないことがよくある。
- 7 何かやろうと思いついても、できそうもない気がしてすぐやめてしまう。
- 8 新しいことをするのは心配でたまらないから、できれば避けたい。
- 9 いつも病気ではないかと心配ばかりしている。
- 10 いつも緊張していてリラックスできない。
- 11 人と会うとき、自分が何か悪い印象を与えるのではないかと心配だ。
- 12 不安にかられて、いてもたってもいられないことがある。
- 13 自分の望むことは、なぜか実現しないような気がしてしかたない。
- 14 時間がたつにつれて、何か恐ろしいことが起きそうでこわくなる。
- 15 何か責任のある役割を任せられるのは、不安で逃げ出したくなってしまう。

茨城県・神奈川県¹の国立大学（主に教育学部）の大学生379名に対して実施した。

- ①成長不安・抑制不安の両尺度（山本，1988）
- ②実存心理検査（CrumbaughのPIL日本版；佐藤，1975）
- ③自我同一性次元尺度（加藤，1986）

なお実存心理検査は、得点が高いほど人生に意味を感じ、生活に目的意識や、生きがいをもっていることを意味し、また自我同一性次元尺度は、個人の自我同一性獲得や達成程度の測定をねらった尺度である。

(2) 実施手続きおよび採点法

調査用紙への回答は、教室で直接記入させた。回答・採点法については、両不安尺度および自我同一性次元尺度は「全然そうではない」～「まったくそのとおりだ」までの6件法で1～6点、実存心理検査はPIL日本版記載のとおりの7件法で1～7点で回答を求め、採点された。

(3) 分析手続き（両不安の3階級分類・分析対象群について）

1) まず得られた合計点は100点満点に換算（不安得点）され、この不安得点を用いて、成長不安・抑制不安がそれぞれ低・中・高の3段階に分類された。分類に際しては、高校生・大学生で基準値を統一するため、両不安の分布状態や合計点の意味解釈上の妥当性（基準値が低・中・高を適確に代表しているものか）なども考慮しつつ、成長不安・抑制不安の各々を低・中・高の3段階に分類するcut off pointが決定された。

すなわち成長不安では、0～60点が低群（L群）、61～75点が中群（M群）、76～100点が高群（H群）とされ、抑制不安では、0～30点が低群（L群）、31～50点が中群（M群）、51～100点が高群（H群）となった。

2) つぎに、決定された成長不安の低・中・高を縦軸、抑制不安の低・中・高を横軸にとり、9つの

セルからなるクロス表を作成した。(Table 2, 3)

3) さらに両不安の相互作用の働きがより明確になるよう、9つのセルからさらに特徴が際立つと考えられる5セルの群(成長不安、抑制不安の順でいうとHL群・HH群・MM群・LL群・LH群)を分析の対象とした。以降の分析検討では、成長不安(positive anxiety)・抑制不安(negative anxiety)それぞれの頭文字p・nをとって、HL群をPn群、

HH群をPN群、MM群をM群、LL群をpn群、LH群をpN群と改名して用いる。(Table 4) また、この5群をもって代表される両不安の相互作用を一要因とみなし、「不安相互作用の要因」と呼ぶことにする。

結果と考察

(1) 両不安の相互作用と実存的傾向の関連

1) 高校生について

実存得点の不安相互作用5群ごとの平均値・N・SDをTable 5に示す。この結果について不安相互作用(Pn群・PN群・M群・pn群・pN群)、学年(1年・2年・3年)、性(男・女)を要因とする3元配置の分散分析を行ったところ、不安相互作用の主効果が有意となった。 $(F=18.72, df=4/212, p<.01)$ (学年の主効果も有意となったが、今回の分析では検討からはずされた。)

さらに不安相互作用の5群の平均値の差について、最小有意差法($p<.05$)による多重比較検定をおこなったところ、M群とpn群の間をのぞく他のすべての間に有意な差が認められた。(Fig. 1)

Table 2 高校生の不安相互作用の9セルの内訳

人数	男女全体	成長不安			計
		低(L)	中(M)	高(H)	
抑	低(L)	52	28	44	124
	制	36	52	28	116
		88	80	72	240
不	中(M)	85	60	44	189
	安	71	80	51	202
		156	140	95	391
高(H)	安	30	31	35	96
	計	31	32	27	90
		61	63	62	186
		167	119	123	409
		138	164	106	408
		305	283	229	817

Table 3 大学生の不安相互作用の9セルの内訳

人数	男女全体	成長不安			計
		低(L)	中(M)	高(H)	
抑	低(L)	13	24	15	52
	制	17	26	21	64
		30	50	36	116
不	中(M)	24	29	26	79
	安	28	48	38	114
		52	77	64	193
高(H)	安	6	11	9	26
	計	10	16	18	44
		16	27	27	70
		43	64	50	157
		55	90	77	222
		98	154	127	379

Table 4 両不安相互作用の分析対象となる代表的5セル

	成長不安		
	低(L)	中(M)	高(H)
抑 低(L)	pn (LL)		Pn (HL)
制 中(M)		M (MM)	
不 安 高(H)	pN (LH)		PN (HH)

Table 5 不安相互作用5群の実存得点(高校生)

平均人数	Pn	PN	M	pn	pN
男	99.5	80.4	87.0	88.0	67.6
	20	17	31	28	19
	16.2	22.2	13.3	21.6	17.3
女	103.0	73.7	86.8	86.3	70.1
	13	12	40	13	20
	10.6	18.7	12.4	14.9	15.0
全体	100.9	77.5	86.9	87.4	68.9
	33	29	71	41	39
	14.2	20.7	12.7	19.5	16.0

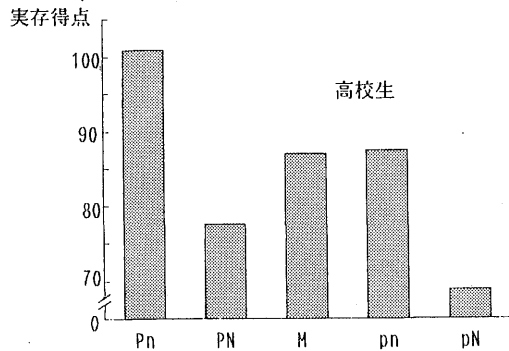


Fig. 1 不安相互作用5群の実存得点

Fig. 1の結果をみると、実存的傾向はPn群が最も高く、pN群が最も低く、PN群がそれについて低いことがわかる。これは成長不安が高く抑制不安が低い人は、実存的(生き方の)傾向がより強いこと、また成長不安が高くても抑制不安も高い人、成長不安が低く抑制不安が高い人は実存的傾向が低いことを示している。すなわちこの結果は、抑制不安の高さが、実存的傾向の低さと密接な関係がもっていることを意味していると考えられる。

2) 大学生について

実存得点の不安相互作用5群ごとの平均値・N・SDをTable 6に示す。この結果について不安相互作用(Pn群・PN群・M群・pn群・pN群)、学年(1年・2年・3年・4年)を要因とする2元配置の分散分析を行ったところ、不安相互作用の主効果のみ有意となった。(F=15.03, df=4/167, p<.01)

さらに、不安相互作用の5群の平均値の差について、最小有意差法(p<.05)による多重比較検定をおこなったところ、PN群とpN群、M群とpn群を除く、その他のすべての群間に有意な差が見られた。(Fig. 2)

Fig. 2に示されるような結果は、高校生の結果とほぼ同様であるが、大学生のほうが、M群とpn群の実存傾向はやや高く、pN群のそれは非常に高くなっていることが、その違いである。これは大学生では、中間群(M群)の人や成長不安・抑制不安

Table 6 不安相互作用5群の実存得点(大学生)

平均 人数 SD	Pn	PN	M	pn	pN
全体	101.7 36 12.6	77.2 27 18.5	92.8 77 11.6	91.0 30 15.0	81.5 16 11.0

注) 全体のみ

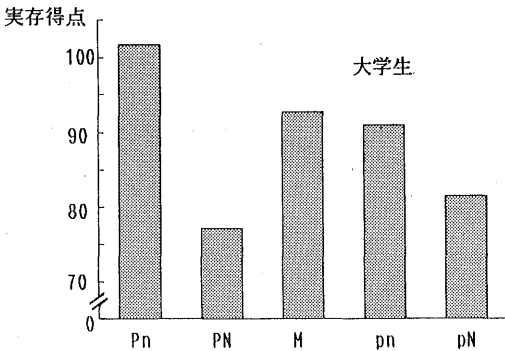


Fig. 2 不安相互作用5群の実存得点

ともに低い人(pn群)の実存的傾向が、高校生の同群の人よりも高いこと、またかなり抑制不安が高い人(pN群)の実存的傾向も、高校生の同群の人より高いことを示すものと考えられる。

以上の高校生・大学生の結果を発達の見ると、それまで高校段階で成長不安も普通かそれ以下だった人で、自己の人生の意味や生きがいなど特に意識しなかった人も、大学生の段階になるとより本気に取り組むようになる傾向が増すということがわかる。また大学生のpn群と高校生のpn群に関しては、その質が異なるのではないかと考えられる。つまり、大学生のこの群には、自我同一性の拡散など同一性達成課題の失敗に関連したものが多くと思われるが、高校生では、より資質的で病的傾向の高い不適応からの不安で苦しむものが、多くここに含まれるのではなかろうか。

(2) 両不安の相互作用と同一性達成傾向の関連

1) 高校生について

同一性得点の不安相互作用5群ごとの平均値・N・SDをTable 7に示す。この結果について不安相互作用(Pn群・PN群・M群・pn群・pN群)、学年(1年・2年・3年)、性(男・女)を要因とする3元配置の分散分析を行ったところ、不安相互作用の主効果が有意となった。(F=41.70, df=4/393, p<.01)

さらに不安相互作用の5群の平均値の差について、最小有意差法(p<.05)による多重比較検定をおこなったところ、PN群とpN群の間をのぞく他のすべての間に有意な差が認められた。(Fig. 3)

この結果から、高校生ではPn群がもっとも同一性達成の程度が高く、つぎにpn群・M群と続き、PN群・pN群はもっとも低い値を示している。すなわち、成長不安が高く抑制不安が低い人は同一性達成の程度がもっとも高く、つぎにどちらの不安も低

Table 7 不安相互作用5群の同一性得点(高校生)

平均 人数 SD	Pn	PN	M	pn	pN
男	64.8 44 9.1	47.7 35 10.7	54.7 60 9.2	59.3 52 11.5	44.4 30 7.9
女	61.8 28 8.4	47.5 27 8.4	53.9 80 6.6	56.2 36 7.4	46.8 31 5.8
全体	63.6 72 8.9	47.6 62 9.7	54.2 140 7.8	58.0 88 10.1	45.6 61 6.9

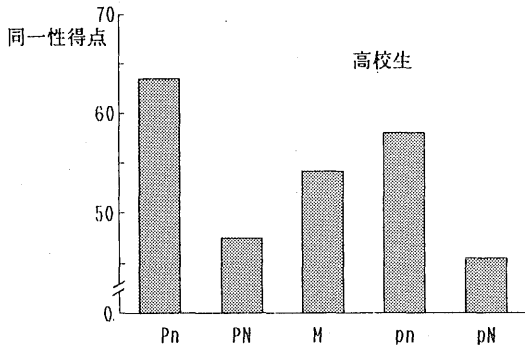


Fig. 3 不安相互作用 5 群の同一性得点

い人も同一性達成の程度は比格的高い傾向にあり、両不安の平均的な人 (M 群) は同一性達成の程度もほぼ平均 (56.3) を示し、両不安ともに高い人および抑制不安のみ高い人は、同一性達成の程度が低いことをあらわしている。

この結果は、成長不安が高く抑制不安が低いことが同一性達成程度の高い、より成熟した人格と強く関連すること、両不安の低いこと (不安の少ない人) も安定性の高い人格と関連していること、さらに両不安が中程度では同一性達成程度も平均的なこと、さらに両不安が高い、あるいは成長不安より抑制不安が高いことが、同一性達成程度の低さ、つまり人格の未成熟性と強く関連していることを示唆するものである。これらの結果を要約すれば、同一性達成程度に関しては、成長不安がそれを高める作用より、抑制不安がそれを低下させる作用の方が優位であることを示唆するものと考えられる。

2) 大学生について

同一性得点の不安相互作用 5 群ごとの平均値・N・SD を Table 8 に示す。この結果について不安相互作用 (Pn 群・PN 群・M 群・pn 群・pN 群)、学年 (1 年・2 年・3 年・4 年) を要因とする 2 元配置の分散分析を行ったところ、不安相互作用の主効果のみが有意となった。 ($F=22.03$, $df=4/167$, $p<.01$)

さらに不安相互作用の 5 群の平均値の差について、最小有意差法 ($p<.05$) による多重比較検定をおこなったところ、PN 群と pN 群、Pn 群と pn 群の間をのぞく他のすべての群間に有意な差が認められた。 (Fig. 4)

Fig. 4 に示されるような結果は、全体的には高校生の結果とほぼ同様であるが、大学生のほうが、pn 群・pN 群ともに同一性達成程度が、高校生の同群に比べて高くなっている点が、その違いである。pn 群・pN 群は、同一性達成の程度を高めると考え

Table 8 不安相互作用 5 群の同一性得点 (大学生)

平均 人数 SD	Pn	PN	M	pn	pN
全体	62.1 36	45.8 27	56.3 77	60.4 30	48.1 16
	9.1	8.7	6.6	6.6	8.1

注) 全体のみ

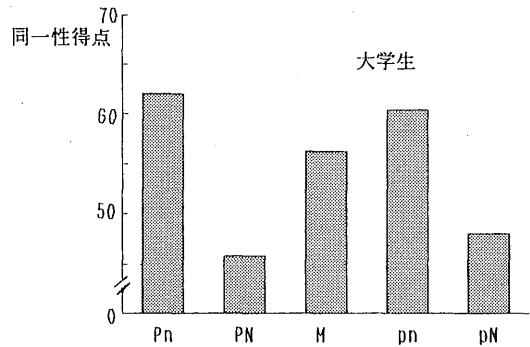


Fig. 4 不安相互作用 5 群の同一性得点

られた成長不安が低い 2 群であり、大学生でこの 2 群の同一性達成度が高校生よりも高い値を示していることは、興味深いことである。つまり大学生では、成長不安がたとえ低いものでも成長不安が同程度の高校生よりは同一性達成度が高いことを意味する結果と考えられるからである。またこの結果は、同一性達成という課題に関しては、高校の時期よりも、むしろ大学の段階でより中心的な問題となることを示唆するものと思われる。

総合考察

青年期という発達段階は、第二の誕生とか第二の分離一個体化の時期ともいわれ、意識するか否かにかかわらず、またその結果、悩むとか衝動的な行動にでるとかにもかかわらず、自分の将来や理想の実現など未知なるものにどこかで不安感をもつとされる。したがって人格的な成長や変容の著しいこの時期に、自己の不安にどう対処するかは、以降の生き方に影響をもたらすほど重大事となるわけである。この際、従来の抑制不安にくわえ、成長不安 (人間の成長を促進する働きをもつ不安) という視点は有効なことが山本 (1988) により既に指摘されてきた。本研究はさらに実際的な視点から、両不安を合わせ持つ存在として青年をとらえ、両不安の組み合わせ要因に関する検討を行った。その結果、両不安の相

相互作用の要因が、生きがいや人生の意味などをしめす実存的傾向や、自我発達の諸相をあらわす自我同一性達成の傾向と、特徴的な関係をもっていることが示唆された。今後は、青年期における教育・生徒指導・学生相談・心理臨床など実践への応用可能性をも考慮し、抑制不安から成長不安への移行・変容の解明の鍵となる両不安の規定要因の検討が課題である。

要約

本研究の目的は、山本(1988)による「成長不安」と「抑制不安」に関して、両者の組み合わせによる相互作用の要因と、実存的傾向や自我同一性達成の程度という人間的成長との関連性を検討することであった。そのための両不安尺度とともに実存的傾向や自我発達の程度を測定するための尺度(PIL日本版・自我同一性次元尺度)が、高校生817名、大学生379名に対して実施され、成長不安と抑制不安それぞれの低群・中群・高群を掛け合わせた代表的な5セルに関して、分析検討がなされた。その結果、実存的傾向については抑制不安が低い場合、高い成長不安とは強い関係を持ち、抑制不安が高い場合、成長不安にかかわらず実存的傾向は低いこと、自我同一性については成長不安よりも抑制不安の低いことが自我同一性の高さと強い関係があることが明らかとなった。

引用文献

- Alpert, R., & Norman, R. H. 1960 Anxiety in academic achievement situations. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **61**, 207-215.
- Freud, S. 1969 Über die Berechtigung, von der Neurasthenie einen bestimmten Symptomenkomplex als "Angstneurose" abzutrennen. (「不安神経症」という特定症候群を神経衰弱から分離する理由について) 加藤正明(訳) 改訂版フロイド選集10巻 不安の問題 日本教文堂
- Freud, S. 1926 Hemmung, Symptom und Angst. (制止・症状・不安) 加藤正明訳 改訂版フロイド選集10巻 不安の問題 日本教文堂
- Frankl, V. E. 著 霜山徳爾(訳) 1957 死と愛実存分析入門 みすず書房
- Horney, K. 著 対馬 忠(監修) 1986 自己実現の闘い—神経症と人間的成長—
- 福井康之 1980 青年期の不安と成長 有斐閣新書
- 今井 寛 1975 恐怖と不安 感情心理学3巻 誠信書房
- 加藤 厚 1986 同一性測定におけるアプローチの比較検討 *心理学研究* **56**, 357-360.
- 加藤隆勝 1964 青年期 誠信書房
- Kierkegaard, S. 著 1950 齊藤信治(訳) 不安の概念 岩波新書
- 小林純一 1973 不安と創造性 岩崎学術出版
- Mandler, G., & Sarason, S. B. 1952 A study of anxiety and learning. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **47**, 166-173.
- Maslow, A. H. 1962 上田吉一(訳) 完全なる人間 誠信書房
- 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・齊藤耕二・堀洋道 1965 自我と適応の関係についての研究(1) Self-Differential 作製の試み 東京教育大学教育学部紀要 **12**, 85-106.
- 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・齊藤耕二・堀洋道 1967 自我と適応の関係についての研究(2) Self-Differential 作製 東京教育大学教育学部紀要 **13**, 59-67.
- 西里静彦 1960 不安尺度に関する因子分析的研究 *心理学研究* **31**, **4**, 228-236.
- Rollo, May 1963 小野泰博(訳) 不安の人間学 誠信書房
- 佐藤文子 1975 実存心理検査—PIL—岡堂哲雄(編) *心理検査学* 323-343.
- Spielberger, C. D. 1972 Anxiety: Current trend in theory and research. Vol. 1&2 New York: Academic Press,
- 鈴木知準 1987 不安解決の講義 誠信書房
- 鈴木知準 1960 一つの生き方 白揚社
- 田代信雄 1984 不安の起源と不安の意義 教育と医学5月号特集—ストレスと不安 教育と医学の会編。
- 津留 宏・西平直喜 1968 現代青年の悩み 依田新(編) 大日本図書
- Wolpe, J. 1958, 金久卓也(訳) 逆制止による心理療法 誠信書房 1977
- 山本誠一 1988 青年期における不安の二側面—「成長不安」と「抑制不安」の検討—, 筑波大学修士論文(未公開)
- 依田 新 1963 青年心理学 培風館